慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦前期日本における政党政治の盛衰 : 政治家大麻唯男の履歴への影響
Sub Title	The Rise and Fall of Party Politics in Prewar Japan : Its Influence on Ōasa Tadao's Career
Author	玉井, 清(Tamai, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1991
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.64, No.4 (1991. 4) ,p.45- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19910428-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦前期日本における政党政治の盛衰

——政治家大麻唯男の履歴への影響——

玉井清

一、序
二、大麻の政界進出と時代背景
三、政党政治家大麻の飛躍
四、大麻の入閣をめぐる障壁
五、結語

一、序

政治を志す者が政界において自らの履歴を上昇させうるか否かは、彼個人の政治家としての資質、能力によるところが多大であることはいうまでもない。しかし、同時に彼を取り巻く政治環境が、政治家としての飛躍を加速することも、逆に阻害することもあり、かかる客観条件が各政治家の履歴に少なからぬ影響を与えていることは想像に難く

ない。本稿が考察の対象とする政治家大麻唯男の履歴もその例外ではなく、彼の生きた時代の影響を少なからず受けていた。

明治二二年（一八八九年）七月に熊本に生まれた大麻は、熊本中学、第五高等学校を経て東京帝国大学法学部政治学科に入学した。[1] 大正三年（一九一四年）七月に同大学を卒業後、同年一一月に文官高等試験に合格し内務省に入省した。[2] 彼は、大正一三年（一九二四年）五月の第一五回総選挙に出馬したことを契機に官界から政界への進出を果した。[3] 爾後、大麻は、昭和戦前期には二大政党の一方の雄であった立憲民政党（――以下、民政党と略）に所属し党歴を重ねつつ幹部政治家として同党の中枢を担うようになるが、[4] このように彼が政治家としての成長を遂げた時代の我が国は、政党政治の盛衰期に該当した。すなわち、大麻が政界に進出し陣笠代議士から政党の中堅幹部へと成長する大正中葉から昭和初頭に至る我が国は、原敬内閣の成立を経て二大政党による政党政治の黄金期を迎えていた。しかしながら、大麻が政党の幹部となる頃には、国内においては五・一五事件や二・二六事件が、国外においては満州事変や日中戦争が勃発し、軍部の抬頭とともに政党政治は、崩壊を余儀なくされていた。

本稿の目的は、こうした政治環境の変動が官界から政界に進出し政党幹部へと成長していく政治家大麻の履歴にいかなる影響を与えたかを考察するとともに、大正から昭和戦前に至る政党政治の盛衰の一斑を明らかにすることにある。

（1） 大麻の第五高等学校までの経歴については、酒井正文「大麻唯男伝記資料――郷里、家系、その成長」（『杏林大学社会科学研究』〈第六巻第二号、平成二年〉）を参照のこと。また、彼の伝記には、坂田大『人間大麻唯男』（坂田情報社、昭和三五年）がある。

（2） 内務省入省後の大麻は、山梨、山形、神奈川を転任し、大正九年（一九二〇年）に本省の警務局に戻り、同一二年一〇月、警保局外事課長に就任した（秦郁彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』〈東京大学出版会、一九八一年〉五四頁）。

（3） 大麻の初立候補の事情については、浅野和生「政友会分裂の地方への波及状況と大麻唯男初立候補の事情」（『中部女子短

期大学紀要』〈第一八号、昭和六三年〉）を参照のこと。

（4）民政党時代の大麻については、内川正夫「少壮政治家時代の大麻唯男――床次竹二郎脱党問題を中心として――」（『法学政治学論究』〈第五号、一九九〇年夏季号〉）、浅野和生「戦前期における地方選出代議士の選挙区での活動――熊本第一区大麻唯男の研究――」（『中部女子短期大学紀要』、第二〇号、平成二年三月）、酒井正文「新体制下の民政党と大麻唯男」（『杏林大学社会科学研究』〈第四巻第一号、昭和六二年〉）を参照のこと。

二、大麻の政界進出と時代背景

多くの政治家にとり閣僚の座を射止めることは、大きな目標の一つであろう。このことは、明治憲法下の我が国においても同様であったが、その閣僚への道筋は時代の流れとともに変化した。秦郁彦氏は、明治期に閣僚の座を射止めた七六名のうち、行政官の経験を持たぬ者が二人しかいなかったことを指摘しているが[1]、このことは当該期の閣僚の座が官界における履歴と密接な関係にあったことを物語る。つまり、明治期には官界において自らの履歴を上昇させることが閣僚への近道であった。例えば、官僚として昇進し、局長さらには次官の職に就くとともに貴族院議員に勅選され入閣に至るというのが大臣への有望ルートであった。内務省警保局長から貴族院議員に勅選され、さらに司法次官を経た後、第二次松方正義内閣及び第二次山県有朋内閣の法相、第一次桂太郎内閣の法相・内相兼農商務相として入閣した清浦奎吾はその典型であろう。

しかし、大正から昭和初頭にかけ政党が官僚に対する相対的地位を向上させ自ら政権を獲得するようになると、明治期に確立していた閣僚への如上の出世街道は次第に狭く険しいものとなり、これにかわる新たな道筋が拡張されることになる。それは、衆議院に立候補し議席を獲得するとともに、有力政党に所属し党歴をすすめることであった。つまり、政党内閣が成立し自党の幹部党員が殆ど全ての閣僚の座を占めることを想定すれば、如上の経歴は入閣に際

表1　文官出身の衆議院議員当選者

	実施内閣	実施年月日	人数	定員
第12回	第二次大隈	大正 4.3.25	9	381
第13回	寺　内	大正 6.4.20	1	〃
第14回	原	大正 9.5.10	20	464
第15回	清　浦	大正13.5.10	10	〃
第16回	田　中	昭和 3.2.20	36	466
第17回	浜　口	昭和 5.2.20	39	〃
第18回	犬　養	昭和 7.2.20	40	〃
第19回	岡　田	昭和11.2.20	21	〃
第20回	林	昭和12.4.30	0	〃
第21回	東　条	昭和17.4.30	2	〃

『衆議院議員選挙の実態―第1回～第30回―』（財団法人公明選挙連盟編集・発行，昭和42年）171頁より作成。

しての重要な条件となる。ここにおいて政界に野心のある官僚にとり官界に留まり自らの履歴をすすめることは、明治期のように必ずしも期待と確信を抱きながら選択することのできぬ進路となりつつあった。むしろ大臣を夢みる官僚の中には、官界を去り政党に入党し衆議院議員選挙に出馬することにより魅力を感じる者が出てくるのである。

まず、このことは、衆議院議員総選挙における文官出身の当選者数の推移を示した表(1)より裏づけることができる。すなわち、大正初頭まで一ケタに留まっていた文官出身の当選者数は、我が国最初の本格的な政党内閣である原敬内閣の下で実施された第一四回総選挙において二ケタの二〇名に増加した。以後この当選者数は、第二次護憲運動が高揚する中、超然内閣との非難を受けた清浦内閣の下で実施された第一五回総選挙において減少をみせるが、続く第一六～八回と、いずれも政党内閣の下で実施された総選挙において増加していることがわかる。因に、この文官出身の当選者数は、五・一五事件以降の政党退潮期に至ると減少に転じる。つまり、政党内閣崩壊後の岡田啓介内閣の下で実施された第一九回総選挙における当選者数は、前回犬養内閣下の総選挙におけるそれに比し半減している。さらに、政友会、民政党の二大政党からの入閣者がなく成立した林銑十郎内閣下の第二〇回総選挙においては、文官出身の当選者は皆無になった。以上のようにかかる数字の増減は、政党政治の盛衰を反映していることがわかる。

さらに、大正から昭和初頭にかけての政党の影響力向上が官僚組織内に与えた動揺は、前述した文官出身者の当選

者数の増加以外に、当時の関係者の一人である守屋栄夫が自らの胸中を披瀝した記述からも裏づけることができる。因に、守屋は、明治四三年（一九一〇年）に内務省に入省後[2]、内務官僚としての履歴をすすめ同省社会局社会部長で高等官一等の地位にあった昭和三年（一九二八年）、第一六回総選挙に宮城一区より立候補し当選を果した[3]。しかしながら、官界においてかかる地位に昇進するまでの守屋は、郷土から衆院選出馬の話が持ち込まれてもこれを固辞し、むしろ官僚としてより高い地位に上るとともに貴族院議員となり好運がめぐり来たら台閣の高きに列することもできようと自らの抱負を持っていた[4]。つまり、彼は明治期に確立していた前述の閣僚への出世街道を期待を抱きながらすすむつもりであったのである。しかしながら、原敬内閣の成立に象徴される如く大正から昭和にかけ官僚ではなく政党が政治の中心に位置する時代がおとずれると、こうした彼の希望が不安へと変わっていく。すなわち守屋は、閣僚をはじめ政務に関する重要な地位は議会に席を有するものでなければなれず、官僚に留まる限り永久に事務官として立ち働かねばならないと認識するようになる[5]。ここにおいて彼は官界を去り政界への進出を決意するのであるが、その胸中を次のように記している。少々長くなるが政党政治高揚期における一官僚の心情を如実に示す記述として紹介する[6]。

> 政党内閣となってからの事務次官のみじめさ、局長部長等の貧弱さ、そして大根でも切るやうに首を斬らるゝ地方長官の腑甲斐なさ、壇の浦の平家のそれではありませぬが、黄昏がれ行く落日の寂寥を感ぜしめらるゝのであります。私の友人のうちの一人の知事は、屈辱的な転任を命ぜられて辞表をたゝきつけました。その他にもこれと同じことをやった知事があります。某々省の次官は政務官に仕事を奪はれて、殆んど其の地位が認められませぬ。実際真面目に官界に生活して実力を持ってゐる者にとっては、近時に於ける政界の気分は、堪へられぬ侮辱を感ぜしめ憤怒を抱かしめます。私は知事としての経験がありませぬし、次官でもありませぬから、現実にさうした苦々しさを味はった譯ではありまぬけれども、しかし今日は他人の身の上であることが、明日は私の身にふりかゝることなのです。この儘にして行けば、いづれは私の上にこの不愉快な事実が見舞ふことなのです。既にさうなってゐる以上、おめ〳〵と首さしのべて待ってゐる気にはなれないのであります。私は寧ろ此の際進んで官僚の足を

洗って代議士となり、政界の潮流に棹さして、行くべき所まで行ってみようと思ったのであります。

以上の守屋の告白は、誇張した表現がなされているため割引いて読む必要があろうが、政党の影響力向上が官界に与えた動揺を具体的に示す記述として興味深い。そして、本稿で取り挙げる大麻が、こうした予兆の既に存した時代に官僚生活を始めたことに留意しておく必要がある。すなわち、大正三年（一九一四年）に内務省に入省した大麻は、山梨、山形、神奈川の各県庁を転任するが、当該期の政権は立憲同志会を与党とする第二次大隈重信内閣、立憲政友会（――以下、政友会と略）と友好関係を樹立していた寺内正毅内閣、さらには政友会を与党とする原内閣であり、内務省の人事等にも各政権を支えたこれら政党の影響力を充分感知できる時代であった。(7) また、郷土の先輩で大麻の仲人をも務めた小橋一太は、(8) 内務省次官の座にあった原内閣下の第一四回総選挙に熊本第一区より立候補し当選を果している。さらに、大麻が官僚生活を始めたばかりの山梨、山形県庁時代、知事の座にあり寵愛を受けた添田敬一郎も、(9) 大正一二年（一九二三年）四月、山形県選出代議士戸狩権之助死去に伴う衆院補欠選挙に立候補し当選を果していた。(10) このように大麻は、寵愛を受けた直属の上司が政界へ進出していくのを横目でみながら官僚生活を送っていたのである。しかも、彼は官僚時代早々より自らの希望を知事ではなく大臣に置き同僚には今に俺がベルで君らを呼んでやると語っていたということからもうかがえる如く、(11)(12) 彼の政治への関心さらには政界進出の野心は強いものがあった。(13)

大正一三年（一九二四年）一月、同郷の清浦奎吾を首班とする内閣が成立したことは、こうした野心を抱く大麻に絶好の機会を与えることになる。すなわち、まず彼は清浦内閣成立とともに内閣書記官長に就任した小橋の引き立てもあり首相秘書官に任命された。(14) さらに、同内閣成立に伴いこれに反対姿勢を示した政友会は、これを支持する政友本党とに分裂するが、これまで大麻の地元である玉名郡全域を選挙区とする熊本第三区選出の代議士が政友会に残留したため、政友本党は同選挙区より立つ立候補者を新たに探さねばならなくなった。ここに、清浦内閣の首相秘書官でもある大麻に衆院選出馬の好機がおとずれることになったのである。(15)

同年五月、清浦内閣の下で実施された第一五回総選挙に、大麻は熊本第三区より立候補し当選を果し、官界から政界への進出を実現した。

(1) 秦郁彦『官僚の研究』(講談社、一九八三年) 七五頁。

(2) 守屋は、明治一七年に宮城県に生まれ、二高を経た後、同四三年に東京帝国大学独法科を卒業した(『議会制度七十年史 衆議院議員名鑑』〈大蔵省印刷局発行、昭和三七年〉五〇五頁)。また、同年一一月に実施された文官高等試験に合格し、内務省入省後、最初は秋田県に配属された(前掲、『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』、四六九頁)。

(3) 社会部長に昇進するまで、千葉、愛知各県理事官、内務省監察官、同参事官、朝鮮総督秘書官、兼朝鮮総督府参事官、総督官房秘書課長、庶務部長を歴任している(同右・『議会制度七十年史 衆議院議員名鑑』)。

(4) 守屋栄夫『風樹の歎き』(編集兼発行人・守屋栄夫、昭和一一年八月一二日——非売品) 一四一~四二頁。

(5) 同右、一四三頁。

(6) 同右、一四三~四四頁。

(7) 寺内内閣の地方官人事と政友会との関係については、中村勝範・玉井清「寺内内閣期における原・政友会の戦略—解散・総選挙を中心に—」(『法学研究』、第六一巻第四号、昭和六三年四月)を参照のこと。

(8) 小橋一雄氏談(昭和六一年一一月九日、於同氏宅。尚、同氏は一太の長男であり、インタビューは、酒井正文、加地直紀、筆者により行なわれた)。また一雄氏によれば、大麻は、神奈川県の課長を辞めて以降(本省に戻って以降)、親父の秘書官みたいになり、大崎の小橋宅から歩いて二、三分のところに住み、しょっちゅう朝は家に来て入り浸りだったという。

(9) 大麻は、添田知事の官舎にいつも遊びに行き、時事を論じ県政を大胆率直に話したので県政の相談役として重用されたという。また、知事官舎に遊びに行くうち添田夫人とも親しくなり、山形県医師会長、西野慎一の令嬢世津を花嫁候補として紹介してもらい結婚に至る(前掲『人間大麻唯男』一七~九頁)。尚、添田の山梨、山形県知事時代、大麻とともに彼に仕えた白根竹介は、当時添田の側近に俊敏なる大麻唯男が居られたので啓発されることが多かった、と回想している(白根「良二千石・添田先生」〈『添田敬一郎伝』〈添田敬一郎君記念会、昭和三五年〉所収、二六二頁〉)。

(10) 添田は、政友会幹部の床次竹二郎並びに知友小橋一太の推薦状を携え選挙を戦った(同右『添田敬一郎伝』、一〇一~二頁)。尚、添田は、第一次山本権兵衛内閣の原敬内相時代に埼玉県知事に就任したことから「政友会知事」と目されるようにな

り、第二次大隈内閣時代に山梨から山形県知事へと転任させられたのも立憲同志会との対立が一因とされた（同上、四一頁）。そして、添田に仕えた大麻も、彼の後を追う如く山梨から山形へ転任したので、添田のかかる転任の事情については充分知悉していたと考えられる。

(11) 前掲、『人間大麻唯男』、二一頁。

(12) これは、大麻の内務省時代の同僚であった唐沢俊樹が伊豆富人に語った一節である（伊豆『吾が交遊録』〈日本談義社、昭和二七年〉五四～五頁）。

(13) 内務省の同僚として大麻とともに仕事をした高橋雄豺が熊本県の役人は、政治運動ばかりやり地道に地方官としての勉強をしないが、これは君達先輩の責任だと、熊本出身の大麻に質したことがあった。これに対して大麻は笑いながら「そんなことを云うけれども、俺の国如は酒ばかり呑んで頭が悪いのだから、政治運動でもやらなけりゃ、地方局へ行って理屈ばかり云っとちゃ偉くなれんから、已むを得ず政治をやるんだ」と答えたという（内政史研究会『高橋雄豺氏談話第二回速記録　内政史研究資料第十三集』〈昭和三九年二月二四日〉二二頁）。この答えは、地方官時代の自分の姿を語っているともいえよう。

(14) 前掲、『人間大麻唯男』、三一頁。

(15) 前掲、浅野「政友会分裂の地方への波及状況と大麻唯男初立候補の事情」参照のこと。

三、政党政治家大麻の飛躍

前章において述べた如く初当選を果した大麻は、床次竹二郎率いる政友本党に所属し政治家としての歩みを始めた。同党は、昭和二年（一九二六年）六月、憲政会と合同し民政党が新たに結成されるが、大麻もこれに参加し幹事に就任した。(1)

爾後、戦時体制下の昭和一五年（一九四〇年）八月に民政党が解党されるまで大麻は同党に所属し自らの履歴を進めていくのであるが、昭和四年（一九二九年）七月、浜口雄幸内閣下において文相小橋の引き立てにより就任した文部参与官が、彼が最初に射止めた顕職といえるであろう。

因に、参与官とは、第一次加藤高明内閣が政務次官とともに新設したものであり、官僚組織内においては政務次官、次官、参与官、局長の順に位置づけられた。また、政務次官、参与官ともに各省一名ずつ勅任により置くことができ、その職掌について前者は「大臣を佐ヶ政務ニ参画シ帝国議会トノ交渉事項ヲ掌理ス」とされ、後者は「大臣ノ命ヲ承ケ帝国議会トノ交渉事項其ノ他ノ政務ニ参与ス」と定められていた(2)。第一次加藤内閣は、かかる政務官制度導入の目的について、国務の公正及び継続性を保障し議会政治の進展を円滑にするため政務と事務の区別を明確にすることにあるとした(3)。しかし、貴族院からこれは政党人の猟官運動を緩和するためのものではないかとの疑問が呈された(4)如く、かかる目的の一つがスポイルズ・システムの確立にあったことは言うまでもない。このことは、表(2)に示したその後の運用の実態からも明らかであろう。例えば、護憲三派内閣として成立した第一次加藤内閣においては、閣僚ポストの配分同様、政友会、憲政会、革新倶楽部と各々の勢力比を勘案して政務官のポストも配分されている。また、第二次加藤内閣から犬養内閣まで政党が単独で政権を獲得した場合、一部貴族院にまわされたポストを除き全て自党の代議士に政務官を配分していることがわかる。民政党を与党とする浜口内閣の文部参与官に同党所属の陣笠代議士大麻が就官したのも、かかるスポイルズ・システムの結果といえる(5)。

このように官僚組織内の序列において局長の上席に位置する参与官に就任した大麻は、官等においても高等官二等を得た(6)。これらの地位は多分に名目的なものとはいえ、彼が官界に留まり履歴を進めた場合には殆ど達成不可能な昇進であった(7)。このことは、大麻と同期で文官高等試験に合格し、内務省に入省した唐沢俊樹、川村貞四郎、川西実三と比較してみれば明らかになろう。因に、彼らは皆、早期に知事に就任している(8)ことから官界における昇進は順調以上であったといえるが(9)、その彼らの大麻文部参与官就任時における官職官等は次の通りである。すなわち、唐沢は内務省大臣秘書官兼会計課長で高等官三等二級に(10)、川西は同省社会局社会部職業課長で高等官三等一級に(11)、川村は山形県の内務部長で高等官三等二級であった(12)。つまり、大麻と同期で内務省の出世頭と考えられる人々でさえ、本省にお

表2　政党内閣成立時における政務官の党派・当選歴

		外務	内務	大蔵	陸軍	海軍	司法	文部	農林	商工	逓信	鉄道	拓務	党派別就官数
第1次加藤内閣	政務次官	1	⑦	⑧	⑥	4	4	⑨	6		△6	①	／	政4，憲5，革1
	参与官	②	③	③	④	11	3	3	5		△3	④	／	政4，憲5，革1
第2次加藤内閣	政務次官	貴	①	⑥	貴	貴	⑤	⑨	④	⑤	④	⑨	／	憲8，　貴3
	参与官	(②)	(③)	(③)	貴	貴	②	⑤	④	⑤	④	(④)	／	憲9，　貴2
田中内閣	政務次官	2	7	4	1	1	7	1	5	7	4	9	／	政11
	参与官	3	2	2	2	4	2	2	3	2	2	2	／	政11
浜口内閣	政務次官	③	⑤	③	貴	貴	⑤	⑥	⑤	④	③	⑥	④	民10，　貴2
	参与官	貴	②	①	③	③	②	②	②	③	②	③	②	民11，　貴1
第2次若槻内閣	政務次官	貴	⑤	②	貴	⑤	③	⑦	⑪	貴	⑥	②	⑦	民9，　貴3
	参与官	③	④	③	③	貴	③	③	③	④	③	②	③	民11，　貴1
犬養内閣	政務次官	貴	3	7	3	貴	6	4	5	1	3	貴	4	政9，　貴3
	参与官	3	2	1	貴	2	3	3	3	3	4	3	2	政11，　貴1

無印……政友会，○……憲政会ないしは民政党，△……革新倶楽部，貴……貴族院議員，（　）……留任。
但し，前内閣存続中に新たな更迭があり，これに伴い就官した政務官が，新内閣時に留任した場合は上欄の人物とは異なるため（　）はつけていない。
第1次若槻内閣成立時には，全政務官が留任したので省略した。
各議員の当選回数は『議会制度七十年史　衆議院議員名鑑』によった。但し，総選挙で当選後，何らかの理由で資格を失い，次の総選挙までに補欠選挙で当選した場合は，通算して1回と数えた。

いては課長、地方庁においては部長であり、いずれも高等官三等に留まっていた。したがって、大麻が局長の上席に位置する参与官に就任し高等官二等を得たことは、彼が政界に進出し、政党政治全盛期を迎える中、有力政党に所属していたからこそ達成しえた昇進といえよう。以上、大麻の文部参与官就任が、多分に名目的なものとはいえ官界に留まる限り殆ど不可能な栄達を意味したことを明らかにしたが、さらにここでは、かかる就官が民政党内における昇進という見地からいかに位置づけられるかを考察してみたい。

まず表(2)に示した浜口内閣の参与官就任者の当選歴に照してみて、大麻の当選二回での同官就任は、異例の抜擢ということは必ずしもできないであろう[13]。しかしながら、その一方において、表(3)に示した如く当時の民政党代議士中、二～三回の当選歴を有する者は合計七七名いたのに対し、浜口、第二次若槻内閣で割り当てられた参与官の全ポスト数は二二であった。したがって、かかる当選歴を有する全ての者が参与官の座を獲得できたわけでなく、猟官運動も熾烈なものがあった[14]。例えば、浜口内閣の政務官選考を報じた新聞によれば、政党出身者に割り当てられる政務次官及び参与官の全ポスト数は二一にもかかわらず、各閣僚が持ち寄った政務官への推薦候補者数は五十余名に上ったと

表3　民政党代議士の当選歴

当選回数	人　数	
1	51	(65)
2	53	(63)
3	24	(31)
4	8	(13)
5	19	(21)
6	8	(11)
7	3	(4)
8	1	(1)
9	0	(0)
10	3	(3)
11以上	2	(2)
合　計	172	(214)

（第56回通常帝国議会終了時〔昭和4年3月25日〕）

各代議士の所属確認は「立憲民政党所属貴衆議員，院外役員，新聞記者住所氏名録」（『民政』，第2巻第12号，昭和3年12月号）を基本にし，その後の死亡及び離党者については，『議会制度七十年史　政党会派編』により修正した。
また，各議員の当選回数は，『議会制度七十年史　衆議員議員名鑑』及び大石末雄『普選の勝者　代議士月旦』（東京平和新報社出版部，昭和3年9月18日）を参考にした。
（　）内は，第55回特別帝国議会終了時〔昭和3年5月6日〕のもの。両者間の数字の変動は，床次派脱党の影響である。

いう。[15] また、このため組閣の鮮やかさに反して政務官の選考は難航し、今回は当選三回以上の者から成るべくこれを採用するとの方針が決定された、とも伝えられた。こうした中、大麻は、浜口内閣の参与官のうち最年少でその職に就いた。しかも、事前の下馬評に参与官候補として挙げられていたにもかかわらず選に洩れた者の中には、大麻を上廻る三回の当選歴を有する一宮房次郎や原夫次郎等がいた。[16] こうした事実に鑑み、大麻の参与官就任は、前述した如く異例の抜擢とはいかないまでも、彼が党内において順調に履歴を進めていた政治家の一人であることを少なくとも示していた。

昭和六年（一九三一年）四月、浜口内閣総辞職とともに文部参与官を辞して以降の大麻は、民政党情報部長を経て、[17] 同九年（一九三四年）一月、同党幹事長に就任し自らの履歴をさらに飛躍させた。しかも、この彼の幹事長就任は、民政党史上において前例なき登用であった。このことは、同党歴代幹事長就任までの各主要経歴を示した表(4)より明らかである。

まず年齢について、大麻の四四歳での幹事長就任は、歴代最年少記録であることがわかる。すなわち、初代幹事長の桜内幸雄が四六歳で就任していることを除けば、五十歳代後半から六十歳代にかけての登用が多い。また、当選歴四回で文部参与官と情報部長以外に主たる経歴を持たぬにもかかわらず幹事長に就任するのも異例であった。なぜなら幹事長は、六～七回の当選歴を有するものが多く、それより若い当選歴しか持たぬものでも総務や政調会長、あるいは俵孫一や永井柳太郎の如く少なくとも政務次官を経験していたからである。しかしながら、大麻はそれまでこれら党役職を務めたことも政務次官の経験もなかった。

そもそも、大麻の政務次官就任は、政党政治全盛期が継続していたならばその実現がより容易なはずであった。例えば、前述した如く浜口内閣の文部参与官に大麻が就任した際、民政党機関誌に掲載された参与官評判記には、第一次加藤、第一次若槻内閣下において参与官であった者の多くが今度の内閣で政務次官に就任している事実に鑑み、此

表4　民政党幹事長の経歴の概要

氏名	就任期間	経歴の概要	
桜内幸雄 (明治13年8月生)	S2.6 ～S3.1	政友本党 総務・政調会長 ——→2回→	幹事長 46歳
小泉又次郎 (慶応元年5月生)	S3.1 ～S4.1	憲政会総務、 民政党総務 ——→6回→	当選 62歳
俵孫一 (明治2年5月生)	S4.1 ～S4.7	三重、宮城→当選→第1次加藤内閣鉄道政務次官 県知事　1回　第2次〃内務〃 ——→民政党総務 ——→2回→	当選 59歳
富田幸次郎 (明治5年10月生)	S4.7 ～S6.1	憲政会幹事長、 民政党総務 ——→6回→	当選 57歳
山道襄一 (明治15年3月生)	S6.4 ～S6.12	当選→第2次加藤、第1次　当選→浜口内閣 4回　若槻内閣文部参与官 ——→6回　鉄道政務次官 ——→7回→	当選 49歳
永井柳太郎 (明治14年4月生)	S6.12 ～S7.5	当選→第2次加藤、第1次→民政党総務 ——→当選→浜口内閣 2回　若槻内閣外務参与官　3回　外務政務次官 ——→4回→	幹事長 50歳
小山松壽 (明治9年1月生)	S7.5 ～S8.1	当選→第2次加藤、第1次 ——→民政党総務 ——→当選 4回　若槻内閣農林政務次官　・政調会長 ——→7回→	幹事長 56歳
松田源治 (明治8年10月生)	S8.1 ～S9.1	民政党総務 ——→当選→浜口内閣 ——→当選 7回　拓務大臣 ——→9回→	幹事長 57歳
大麻唯男 (明治22年7月生)	S9.1 ～S10.1	当選 ——→浜口内閣 ——→当選 2回　文部参与官 ——→4回→	幹事長 44歳

昭和6年1月より4月までは、桜内幸雄が幹事長を務めたが重複するので省略した。

の次の我党内閣では彼等の多くが政務次官に昇格するであろうと予測されていた[18]。確かに、政友会と民政党を中心とする政党政治が継続していたならば、かかる評論は必ずしも的外れなものとはいえなかったであろう。しかし、五・一五事件以降における政党政治の崩壊は、かかる予測の実現に狂いを生じさせた。つまり、政友会を与党とする犬養

内閣の崩壊後、民政党に政権は来ず、中間内閣といわれた斉藤内閣が成立した。同内閣は、政友、民政両党の協力をとりつけたものの各勢力の寄合世帯の色彩が濃厚であった。その結果、民政党に割り当てられた政務次官のポスト数も四に留まり、大麻はその名が下馬評に上ったものの(19)かかる職を射止めることができなかったのである(20)。

このように、政党政治の崩壊が大麻の政務次官就任に足留めをかけている中、彼は、年齢、当選歴、党歴のいずれの面からも前例のなき登用により幹事長に就任したのである。以下、大麻にこうした飛躍をもたらした事情について若干考察を加えておく。

まず、大麻は自らの幹事長抜擢の理由について、次のように回想している。すなわち、当時の民政党は政友会に比しても党幹部の高齢化が問題となりその若返りの方法が党内外で議論されていた。そこで民政党担当の新聞記者の間から思い切って若手から幹事長を出し党の若返りを図れという話が出て、記者団に推薦された格好で幹事長になったとする(21)。確かに、こうした若手抜擢を求める声は、昭和八年（一九三三年）一月の党大会前より既に上がっていた。例えば、当時、情報部長であった大麻唯男と党務部長の田中武雄の名が下馬評に載せられ(22)さらに大麻を幹事長の最有力候補と新聞が報じた時もあった(23)。しかし、この時は党中央の指導体制の変更に伴い大麻の幹事長就任は見送られることになった。すなわち、民政党は従前より置かれていた筆頭総務のポストを廃止し総務による連帯合議制を採用することを決定したため、それまで担当してきた筆頭総務の仕事を幹事長が行うことになった。その結果、幹事長には若手からではなくベテランを起用する方針となり、大麻のような少壮ではなく既に閣僚経験もある松田が就任することになったのである(24)。このように大麻の幹事長就任は実現しなかったものの、前述の彼の回想通りかかる若手抜擢論は次期党大会の役員改選に際しても、大麻の名を再び下馬評にのせる(25)とともに幹事長就任へと導くのであった。

さらに、大麻の幹事長への抜擢理由については、安達謙蔵の脱党問題との関連からも考察しておく必要がある。周知の如く、昭和六年（一九三一年）から翌七年にかけての民政党は、同党幹部である安達及び彼の支持者の脱党をめぐ

り大きく揺れた。この党分裂の危機に際して大麻は、安達と同郷であることから脱党派より新党に合流する可能性があると観測されていた[26]。確かに、熊本における安達の声望と影響力は多大なものがあり、大麻は、次の選挙のことだけを考えるならば安達と行動をともにする方が得策であった。したがって、新聞によれば安達陣営は、大麻を脱党確実組ではないものの勧誘すれば可能性のある新党参加組に数えていた[27]。実際、こうした報道がなされた如く脱党をめぐり大麻の胸中は相当動揺していた[28]。しかしながら、如上の予想に反し大麻は、同じく同郷で官僚時代からの先輩でもあった前出の小橋とともに民政党に残留した。大麻の同党残留の理由については、彼が地方の論理より中央の論理を優先させたためとの考察が既になされているのでここでは触れないが[29]、むしろ本章においては次のことに注目しておきたい。すなわち、前述した如く実現には至らなかったものの昭和八年一月の党大会を前にし大麻の名が幹事長の有力候補に挙げられたが、それは、この安達派脱党から半年も経ぬ時であり、さらにその一年後に彼が幹事長に就任したという事実である。この時間上の近接は、大麻の民政党留党と幹事長抜擢とが無関係でないことを示している。つまり、安達派の脱党をめぐり大麻が従前の予想に反し留党したことは彼の党内における信用を高め、それが彼の幹事長への就任を促したと見做すことができる[30]。

以上の如く、党役員の若返りを求める声に加え、安達脱党をめぐる去就を通じ党内における声望を高めた大麻が幹事長に抜擢されたのである。そして、この幹事長就任は、彼が閣僚の座へ一歩近づいたことを意味した。このことは、例えば、民政党機関誌が大麻の幹事長就任について「政党の幹事長は政界唯一の登龍門である。最近の我党の幹事長たりし人で廟堂に列せざるの士はない[31]」と論じたことからもうかがうことができる。確かに、民政党の場合、安達とともに脱党した経歴を有する富田幸次郎と山道襄一、あるいは衆議院議長を務めた小山松寿を除き大麻就任時までの歴代幹事長は、皆閣僚の座を射止めていた。すなわち、表(4)からも明らかな如く、桜内幸雄は第二次若槻内閣の商工相に、小泉又次郎と俵孫一は浜口内閣の逓信相と商工相に各々なり、永井柳太郎は斉藤内閣の文相になった。また、

前述した如く閣僚経験が既にあり幹事長に就任した松田も、その後再び岡田内閣の文相として入閣を果している。こうした事実に鑑みても、大麻の幹事長就任は、彼が閣僚への階段を大きく一歩登ったと解することができるのである。

（1）幹事は二一名により構成され、そのうち六名は常任幹事であった（『民政』〈一巻二号、昭和二年七月号〉七二頁）。大麻が常任幹事に就任していないこと、さらに二一名の幹事のうち二名を除き全てが彼と同様の当選一回の議員により構成されていたことを考慮すれば、大麻の幹事就任は他に比し突出したものとはいい難い。尚、以下『民政』は、複刻版（柏書房発行）を用いた。

（2）各省官制通則中改正（大正一三年八月一二日勅令第一七六号）（『内閣制度九十年資料集』〈内閣官房編集・大蔵省印刷局発行、昭和五一年〉二九三～四頁）。

（3）『第四十九回帝国議会貴族院議事速記録第二号』

（4）予算委員会における福原俊丸の質問（『第四十九回帝国議会貴族院予算委員会議事速記録第四号』）。また、林博太郎は、かかる政務官制度の導入を、普段は金魚麩やパンしか与えていない鯉や鮒や金魚が沢山いる池に、十年ぶりで英国製のビスケットを投げ込むようなものだと喩え、これを批判した（『第四十九回帝国議会貴族院議事速記録第九号』）。

（5）大麻の参与官就任理由については、床次脱党をめぐる彼の去就との関連からも既に考察がなされている。この点については、前掲、内川「少壮政治家時代の大麻唯男」を参照のこと。

（6）『職員録（昭和四年、八月一日現在）』、（内閣印刷局、昭和四年一一月七日印刷発行）二五一頁。

（7）前掲、『人間大麻唯男』、三六頁。

（8）昭和六年に唐沢と川村が、和歌山、山形の各県知事に、昭和一一年には川西が埼玉県知事に就任している。各経歴は、前掲『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』を参照。

（9）秦氏の研究によれば、明治四〇年より大正六年までの文官高等試験（行政科）合格者中、勅任官（高等官一等、二等、次官および局長級）まで昇進したのは、三二・二パーセントにすぎなかった（前掲『官僚の研究』、二四頁）。

（10）前掲『職員録（昭和四年八月一日現在）』、三一頁。

（11）同右、三六頁。

（12）同右、九一五頁。

(13) 確かに、文相小橋の引き立てという官僚時代に形成された人脈が参与官就任に効果を発揮したものの、内務省警保局外事課長を経て首相秘書官に至る大麻の官歴自体が政務官就任に利したとはいえない。このことは、県知事を務めた倭孫一や大蔵次官を務めた田昌のように勅任官の座まで上り政界へ転進した場合と比較すれば明らかである。つまり、表(2)に示した如く、当選五回前後が政務次官就任の目安となっていた当時において、倭は当選一回で、第一次加藤内閣の鉄道政務次官及び第二次加藤内閣の内務政務次官に、田は当選二回で、第二次若槻内閣の大蔵政務次官に就任している。このように、官界において勅任官の座まで上り政界に進出した場合、その官歴は政党人としての履歴を進める際に勘案されているが、大麻のように書記官あるいは秘書官からの転身の場合、その効果はあまり期待できなかったといえる。

(14) 前掲内川論文、四二～四三頁を参照のこと。

(15) 『東京日日新聞』、昭和四年七月五日付。

(16) 前掲(14)、(15)。

(17) 昭和七年(一九三二年)一月二〇日に就任し(『東京朝日新聞』、昭和七年一月二一日付・夕刊)、翌八年一月二〇日までの一年間、その職に就いた。

(18) 霞関生「参与官評判記」(『民政』〈三巻八号、昭和四年七月五日〉)九六頁。

(19) 『東京日日新聞』、昭和七年五月二八日付。また『東京朝日新聞』、同二九日付。

(20) 浜口内閣成立時に参与官に就任した一一人の民政党代議士のうち、斉藤内閣成立時に政務次官を射止めたのは岩切重雄(拓務)ただ一人だけであった。

(21) 前掲、『人間大麻唯男』、二一二～一三頁。尚、大麻の新聞記者操縦術は巧みであった。例えば、彼は情報部長に就任した際、民政党詰記者会である桜田会の会員八十余名を赤坂の大きな料亭に招待し、二次会から三次会まで自由勝手の飲み放題、翌日の午前十時までの入費は自分が全部負担するから、領収書をつけて本部に集金にくるようにした、という。大麻を幹事長に推す声が新聞記者から挙がったのは、彼のこうした工作の成果でもある(同上、四六～七頁)。

(22) 『東京朝日新聞』、昭和七年一二月四日付。

(23) 同右、昭和七年一二月一五日付。

(24) 『東京日日新聞』、昭和七年一二月二四日付。

(25) 『東京朝日新聞』、昭和八年一二月一一日付。

(26) 『東京朝日新聞』、昭和七年六月二二日付。

(27) 同右、昭和七年六月二三日付。

(28) 大麻を初立候補以来支援してきた小畑惟精は、次のように回想している。すなわち、大麻は安達とは「民政党以来は同じ党であり、郷土の先輩後輩の間柄であり、相当世話になりその去就には可なり苦しんだ様である。近い内に大麻君は訪ねて来ると思って居たが、果せる哉訪ねてきた。国民同盟の問題はどうしようかなあと言う。私（小畑）は即座に答えた。国民同盟に行くか、行かぬかは君の自由だ。全く君の自由意志で決めたまえ。但し君が国民同盟に行くならばおれは絶交するよ、少なくとも将来君を政治家としては認めない、と。大麻君は容を改めよし決めた。断じて国民同盟には行かぬ、と意気俄かに騰った様であった（括弧筆者）」とする（小畑『喜寿・一生の回顧』、〈昭和三四年四月、非売品〉二八五～六頁）。

(29) 浅野和生「戦前期熊本における中央型政治家と地方型政治家」（一九九〇年度「日本選挙学会」第一〇回研究会における報告、平成二年五月一九日）。

(30) 前掲、『人間大麻唯男』、五一～三頁。

(31) 東海散史「我が党新役員」（『民政』〈八巻六号、昭和九年六月一日〉八二頁）。

四、大麻の入閣をめぐる障壁

昭和一〇年（一九三五年）一月に開催された民政党第九回大会の役員改選により幹事長の座から退いた大麻は、爾後も総務、常任顧問等の党要職を歴任しつつ党務に専心した。

例えば、昭和一一年（一九三六年）二月、岡田内閣下に実施された第一九回総選挙において民政党は、二〇五議席を獲得し前回総選挙で政友会に奪われた衆議院第一党の座を奪還することに成功したが、大麻はこの選挙期間中、党本部において選挙対策責任者の一人として奔走した。すなわち、同党はこの選挙に際し大麻を含め一〇名の選挙対策委員を指名したが[1]、実際には幹事長の川崎卓吉、主任総務の頼母木桂吉に大麻が参謀格として働き、この三人が毎日党本部に参集して選挙を指揮した[2]。しかも、選挙期間中、党出身閣僚松田の死去に伴い幹事長の川崎が入閣したため、

選挙後半戦は大麻が事実上幹事長の職を務めた。[3] そもそも、川崎の幹事長就任に際しては彼が貴族院議員であったため、議会中衆議院に関することは大麻が事務代行を務めることが定められていた。[4] 選挙後半戦における大麻の幹事長代行もこれに準じたものであった。

このように総選挙に際し党中央に詰め采配をふるい民政党の衆院第一党返り咲きに貢献した大麻は、自らもまた当該総選挙に立候補し当選した。さらに彼は、翌一二年四月に実施された第二〇回総選挙においても当選を重ね、連続当選六回の経歴をもつに至る。したがって、こうした経歴に加え総裁町田の信頼も厚かった[5]大麻の名は、昭和一〇年代中葉になると内閣の組閣や改造の折に有力な入閣候補として新聞の下馬評にも度々上るようになる。以下、その具体例を一瞥しておく。

まず、彼の名が入閣候補として本格的に取り挙げられるようになったのは、昭和一四年（一九三九年）八月に成立した阿部信行内閣の組閣時においてであろう。[6] 例えば、新聞は、この組閣陣用について政党代表としての大麻の入閣予測を次のように報じていた。すなわち、阿部大将は組閣に際し政民両党より一名ずつ閣僚をとることになるが、民政党からは大麻が永井柳太郎とともに有力であるとしていた。[7] しかし、逓信兼鉄道大臣として阿部内閣への入閣を果したのは、大麻ではなく阿部と同郷で組閣に際しては当初よりその中枢に関与していた[8]永井の方であった。そもそも、町田総裁が民政党の代表として永井ではなく大麻の入閣を望んでいたことは種々の政界観測が伝えるところであった。[9] しかし、阿部はその町田に諮ることなく頭越しに選考を行い、本人との直接交渉によりごぼう抜きの形で永井入閣を強行した。[10] そのため、かかる過程においては、民政党内より不満が噴出することになるが、永井入閣を推す陸軍の暗黙裡の威嚇や政府側の強い要求もあり[11]同党はこれを容認することになる。[12] その結果、大麻の入閣は実現しなかった。

このように阿部内閣成立時に入閣を果せなかった大麻ではあるが、彼の名は同内閣の改造の動きをめぐり再び浮上することになる。ちなみに、阿部内閣は成立時、陸軍の要求であった少数内閣制を組閣方針に掲げ兼任相を複数置い

た。[13] しかしながら、組閣後三ヶ月も経ぬうちにかかる方針は変更を余儀なくされ兼任であった外務と農林に各々専任を置くことになる。さらに同内閣は、陸軍の賛同を得たこともあり、厚生、鉄道についても兼任を解き各々専任大臣を置く方針を打ち出した。[14] しかも、この閣僚補充については政党からの入閣が予想され、ここに大麻の名が次のように再び挙げられることになったのである。まず、最初にこの閣僚補充の動きが伝えられた昭和一四年（一九三九年）一〇月下旬、新聞は鉄道、厚生には政民より各々一名ずつ補充されることになろうが、民政党からは大麻が第一候補に挙っている模様であると報じた。[15] また、大麻の後援もあり代議士になることができた伊藤五郎氏は、一〇月二〇日の自らの日記に「午前十二時、星ヶ岡茶寮において大麻先生の御招待があった。先生は近く大臣の椅子を獲得するのではなかろうか」と、[16] 同月二三日には「午後本部へ行く。大臣の下馬評が盛んである。大麻先生は文部大臣に擬せられているとか。その実現を祈ること切」と記していた。[17] 閣僚補充の動きを背景に書かれたかかる日記の記述からは、大麻周辺の人々に彼の入閣が実現性の高いものと認識され、またそれだけに期待も高揚していたことをうかがうことができる。

しかし、この閣僚補充については風評だけが先走る形となり、かかる動きが本格的に活発化するのは、議会開会が間近に迫った翌一一月の中頃を過ぎてからであった。そして、当初ここにおいても大麻の名は、小泉又次郎、小川郷太郎、小山松寿、勝正憲の名とともに民政党を代表する入閣候補として挙げられ、[18] 依然として大麻を最有力候補と観測する新聞もあった。[19] 一方、政府は、阿部首相が「議会前に民政よりなるべくは町田総裁の出馬を促し若し引受けざるときは適当なる人を推薦せしめ」ると語っていた[20]如く、町田を第一候補に考えそれが不可能ならば民政党から適当な人物を推薦させ入閣させる方針であった。したがって、政府の方針と大麻の入閣とは必ずしも相容れないものではなかった。

しかし、一一月一九日に阿部首相が民政党の党内事情を聴取するため永井逓相と行なった会談以降、[21] 政府のかかる

入閣方針に修正が加えられ、大麻入閣の可能性は事実上断たれることになった。すなわち、この会談以後、政府は民政党の入閣候補者を町田一人に絞り、大麻を含め下馬評に挙げられていた他の候補者を交渉の俎上に載せることには消極的となった。阿部・永井会談の具体的内容は詳かではないが、その結果から推断する限り、永井が阿部に民政党からの入閣者は町田以外に適格者はなく下馬評において有力視されている大麻では不可の旨、進言したと考えられる。このように永井が大麻の入閣に難色を示していたことは、改造人事をめぐる政府部内の意見対立として新聞が次のように報じていたことからもうかがうことができる。すなわち、河原田稼吉文相、遠藤柳作書記官長、唐沢法制局長官らは町田総裁を中心とする党の意向に照らし大麻の入閣を求めようとしているのに対し、永井逓相は大麻の入閣を喜ばず小原直厚相、伍堂卓雄商相らも大体同意見であったとする。(22)

阿部内閣は、民政党を代表し入閣していた永井のこうした意向を勘案し、町田が胸中において希望する大麻ではなく町田本人への入閣交渉を積極的に進めることになる。政府のかかる説得工策は、陸軍までが乗り出し行なわれたが、(23)町田はあくまで閣外にて協力する旨を伝え入閣を固辞し続けた。その結果、阿部内閣は、町田入閣を断念するとともに他の民政党員からの入閣も行なわず、貴族院から永田秀次郎を抜擢し鉄道相に据え改造人事を終えた。

昭和一五年（一九四〇年）一月、阿部内閣が陸海軍の協力を得られず総辞職すると米内光政海軍大将に大命が降下された。そして、この米内内閣の組閣に際し、三度大麻の名が挙げられることになる。当初、同内閣への民政党からの入閣は二名が予想されていたが、その内一名は桜内幸雄が確定的であり残り一名には大麻、小川、勝の名が下馬評に上っていた。(24)しかも総裁の町田は、ここにおいても大麻の入閣を希望し組閣をめぐり米内と会談した際、彼の入閣を要請したと報じる新聞もあった。(25)しかし、政府は、大麻ではなく彼と同じく下馬評に挙げられていた勝を民政党より逓相に抜擢して組閣を行なった。この人選に関しては、大麻と大学が同期で既に大臣経験がありながらも今回は法制局長官としての入閣が内定していた広瀬久忠とのバランス上の問題から大麻の入閣が見送られ、(26)組閣本部の中枢にい

た石渡荘太郎内閣書記官長と親交が深かった勝の入閣に至ったとの観測が当時なされた。[27] いずれにせよ大麻は米内内閣成立に際しても、事前の下馬評に挙げられながら入閣を果すことができなかったのである。しかも、同内閣には同郷で政敵の関係にあり従前より入閣競争を続けてきた政友会の松野鶴平が鉄道相として入閣した。この松野の入閣に関して「政敵大麻唯男氏を尻目にかけた点と共に松野氏としては恐らく宿年の希望を達したことに会心の笑を洩らしてゐるだろう」との評が存したことからもうかがえるように、[28] 入閣競争に負けた方の大麻の落胆と焦燥の念は多大なものがあったと想像される。[29]

以上、阿部内閣から米内内閣に至るまで、大麻の名が有力な閣僚候補として再三挙げられたこと、しかしそのいずれの場合も入閣には至らなかったことを示した。また、このように彼の入閣が実現しえなかった理由についても新聞の観測に基づいてではあるが、各々の組閣経緯との関連から言及した。勿論、かかる理由に関しては大麻個人の問題からも考察せねばならないであろう。例えば、大麻は政治家でありながら演説が不得意であり、むしろ政界の水面下で奔走することの方を得手とした。したがって、先述した如く党務に専心しその実績を着実に重ねていったものの、彼はあくまで影の政治家であり政治家としての華を欠いた。つまり、民政党が鉦や太鼓で人集めをしようとする時には不可欠な存在であったことから三木武吉より民政党のマネキンとの異名をもらうことになる永井[30]とは対称的な政治家であった。大麻の入閣に関しては、このように政治家としてあまりに地味であったことが少なからず災いしたといえよう。[31] また、大麻個人の問題として、彼が他の民政党員から少なからず嫉視せられていたことも看過できぬであろう。先述した如く、大麻は幹事長に異例の抜擢をされ総裁町田の信頼も厚く寵愛を受けたが、このことは逆に他の党員からの嫉妬心を招くことになったのである。例えば、昭和一一年四月に民政党の常務顧問に就任した大麻は、非公式の席上「余り総裁（町田――筆者注）ニ重用セラルノデ、ハタノ風当リガワルイノデ一時常務顧問ニナッタ」[32]と語っていたが、こうした大麻の言動からも党内に生じた彼に対する如上の感情をうかがうことができる。当然のことな

がら、こうした党内の感情が大麻入閣の阻害要因となった。[33] しかも、当時の政党を取り巻く政治環境は、大麻入閣に対する他の民政党員の嫉妬心を助長することはあっても緩和させる状況にはなかった。最後に、当該期のいかなる政治環境が結果として大麻の入閣をより困難にしたのか考察をすすめることにする。

周知の如く、五・一五事件による犬養毅内閣の崩壊から敗戦に至るまで、我が国に政党内閣が成立することはなく、このことは、政党人の入閣枠を狭めることになった。すなわち、昭和初頭の政党内閣期においては、陸海軍を除く殆ど全ての閣僚ポストに政党人を充てることが可能であった。しかし、五・一五事件を契機に生じた政党政治の崩壊はこれを不可能ならしめ、斉藤実内閣以降に成立した内閣において政友会、民政党の二大既成政党にまわされる閣僚ポストは各々二ないしは一に留まるのが通例となり、林銑十郎内閣時の如く零になることさえあった。当然のことながらその結果、政党は大麻のように党歴や当選歴さらには年齢等において充分資格を有する初入閣待望者を党内に山積させることになった。しかも、その一方において永井の如く斉藤内閣の拓務相、第一次近衛文麿内閣の逓信相、阿部内閣の逓信兼鉄道相と、自党に割り充てられた数少ない閣僚ポストを再任する者もいた。[34]

因に、民政党の場合、大麻が幹事長に就任した昭和九年一月より彼が閣僚候補として本格的に下馬評に上るようになる阿部内閣の成立以前、昭和一四年一月に開催された党大会までに同党の総務、幹事長、政調会長の党役職に就任した者は四四名いた。しかし、そのうち昭和一四年一月時点において閣僚経験のある者は九名に留まり、その間死去した二名を除き大麻を含む三三名は未入閣者であった。[35] しかも、この三三名のうち大麻と同年齢のもの一人を除く残りの三二名全ては彼より年上であった。また、当選回数についても大麻と同じ六回の当選を果している者九名、彼を上廻る七回以上の当選歴を有する者は一三名もいた。さらに如上の三三名のうちには大麻が官僚生活を始めた時、彼の直属の上司として既に県知事に就任していた前出の添田はもいた。添田は、岡田内閣組閣時に入閣が期待されたものの政務次官に甘んじ、[36] 以後も入閣を果しえないでいたのである。

以上のように当時民政党内には、大麻を上廻る経歴を有しながらも未入閣の者が多数いた。したがって、こうした状況下、大麻が町田の寵愛により入閣を果したならば、党内に不満と嫉妬の念が渦巻くことは充分想像しえた。[37] 前述した米内内閣の組閣に関して、桜内以外の「民政からの残り一名は嫁一人に婿八人といった恰好で党内事情から見て最も無難な勝正憲氏が逓相の椅子を占めることになった（傍点筆者）」との評が存したが、[38] これは如上の状況を勘案すればより理解が可能であろう。例えば、大麻より十歳年上の勝ならば、前述の三三名の未入閣者のうち年上は一二名に減る。党内事情から最も無難な人選として大麻ではなく勝が入閣したのには、かかる背景が存したのである。

以上の如く、大麻が党歴を順調にすすめ閣僚候補としての資格を有するようになった時、政党政治は崩壊し政党に配分される閣僚ポストの絶対数も減少していた。その結果、政党は初入閣待望者を党内に多数抱えることになり、彼らの中では少壮政治家と目される大麻の入閣は党内宥和を保つためからもより一層困難になったのである。さらに皮肉なことではあるが、政党政治の崩壊は大麻がかつて見切をつけた官界からの入閣の道を大きく開くことになった。例えば、岡田内閣の藤井真信大蔵相、第一次近衛内閣の賀屋興宣大蔵相、平沼騏一郎内閣の広瀬久忠厚生相、第二、三次近衛内閣の井野碩哉らは、皆次官からの抜擢である。[39] しかも、このうち広瀬は先にも若干触れた如く東大卒業年次、文官高等試験合格年次において大麻と同期であり、賀屋と井野については両年次とも大麻の後輩にあたった。[40] つまり、政党政治の崩壊は、その全盛期に確立されていた政党幹部からの入閣という道筋を狭めた反面、かつて閉塞状態に陥っていた高級官僚から入閣へと至る道筋を復活させることになったのである。したがって、「大麻はモウ十年早く党人生活を開始して居たか、それともずッと官僚でゐたかすれば、或ひは、目標とする国務大臣をとッくにかち得たかも知れぬ。即ち、政党不振期に政党領袖となったがため、あたら大臣の椅子に待ちぼけをくつてゐるのである」との評がなされたが、[41] これは政党政治の盛衰が官僚出身の政党政治家大麻の履歴に与えた影響についての的確な指摘といえよう。

(1) 『民政』(一〇巻二号、昭和一一年二月一日) 一〇四~五頁。
(2) 『読売新聞』、昭和一一年一月二七、二八日付。また、選挙資金の方の主任は川崎で、候補者選定の方は頼母木が主任となり、その間の連絡係を務めたのが大麻であった(『川崎卓吉』〈同伝記編纂会、昭和三六年〉四八一頁)。
(3) 『東京朝日新聞』、昭和一一年二月二日付。
(4) 『民政』(九巻二号、昭和一〇年二月一日) 九五頁。
(5) 町田と大麻の関係については、前掲、酒井「新体制運動下の民政党と大麻唯男」の二一~二頁参照のこと。
(6) 昭和一二年(一九三七年)一月、宇垣一成に大命が下った際、新人からの抜擢があれば大麻らの入閣もありうるとの観測が一部でなされたこともあった(『東京日日新聞』、昭和一二年一月二五日付)。しかし、周知の如く宇垣は、陸軍の反対に会い組閣に失敗する。
(7) 『東京朝日新聞』、昭和一四年八月二九日付、及び同日付・夕刊。
(8) 矢次一夫『政変昭和秘史(下)』(サンケイ出版、昭和五四年) 二九~三一頁。
(9) 『東京朝日新聞』、昭和一四年八月三〇日付。また、前掲・酒井論文の注(22)参照のこと。
(10) 永井入閣を求める緊急総務会の席上、一時緊張の場面が現出された(『民政』〈一三巻一〇号、昭和一四年一〇月一日〉一〇二頁)。
(11) 前掲『政変昭和秘史(下)』、三七~四〇頁。
(12) 前述の緊急総務会において町田は「満面不平の色を包みながら、その(入閣)経緯を報告して承認を求めた(括弧筆者)」という(斉藤隆男『回顧七十年』〈中央公論社〔文庫版〕、昭和六二年〉一四七頁)。
(13) 小原直『小原直回顧録』(中央公論社〔文庫版〕、昭和六一年) 二四〇~一頁。
(14) 『畑俊六日誌』、昭和一四年一一月二三日の条(『続・現代史資料4 陸軍』〈みすず書房、一九八三年〉所収)。
(15) 『東京日日新聞』、昭和一四年一〇月二二日付。
(16) 伊藤五郎『ある政治家の手記』(光和出版社、昭和四二年) 六〇頁。
(17) 同右、六一頁。
(18) 『東京朝日新聞』、昭和一四年一一月一八日付。また『東京日日新聞』、同上一八日、二〇日付。
(19) 『東京日日新聞』、昭和一四年一一月二一日付。
(20) 前掲、『畑俊六日誌』、昭和一四年一一月一七日付。

(21) 『東京朝日新聞』、昭和一四年一一月二〇日付。
(22) 同右、昭和一四年一一月二一日付。また、湘南隠士『新体制秘録』（新興亜社、昭和一六年）三四六～七頁も参照のこと。
(23) 畑陸相の代理として武藤章軍務局長が町田を訪問し説得した（前掲『畑俊六日誌』、昭和一四年一一月二三日の条）。また、その町田訪問の案内役を務めたのが大麻であった（前掲『政変昭和秘史(下)』、五六頁）。さらに、矢次氏によれば、この武藤の町田訪問は、阿部内閣組閣時に永井入閣をめぐり民政党が陸軍との間につくった溝を埋めるべく、大麻が町田入閣の必要を陸軍方面に囁いた結果、実現したものだとする。しかも、武藤の来訪を町田が受けたことで、永井入閣をめぐりつぶされたメンツを回復することができ、さらに陸軍が町田内閣推薦の意志あることを武藤が臭わせたことは同党にとり有益であった。そして、これらのことを見越して策略をめぐらしたのが大麻であったと分析している（同上書、五七～八頁）。
(24) 『東京朝日新聞』、昭和一五年一月一五日付及び『東京日日新聞』、同上一五日付。
(25) 『東京朝日新聞』、昭和一五年一月一六日付・夕刊。また、前掲・酒井論文の注（23）も参照のこと。
(26) 「東人西人」（『東京朝日新聞』、昭和一五年一月一七日付）。
(27) 『東京日日新聞』、昭和一五年一月一六日付。
(28) 「新入閣の人々(上)」（『東京朝日新聞』、昭和一五年一月一六日付）。
(29) 第七十五回通常帝国議会終了後、大麻は入閣を果せなかったことに対し地元の落胆をやわらげるため帰熊した（前掲『人間大麻唯男』、五九頁）。
(30) 前掲『政変昭和秘史(下)』、三七頁。
(31) 伊佐秀雄『世紀の人々』（育生社、昭和一六年三月三一日）二四～二五頁。
(32) 『関屋日記』、昭和一一年五月五日の条。尚、本日記は、東大近代立法過程研究会所蔵のものであるが、本稿においては熊本県立図書館所蔵の複写版を使用させていただいた。
(33) こうした大麻入閣をめぐる党内の異論は、例えば「慎重居士町田老」（『東京日日新聞』、昭和一四年一一月二七日付）や前掲『新体制秘録』（三二五、三七七頁）の政界観測からもうかがうことができる。
(34) それゆえ、永井に対する民政党内の反感は増大していた（「新内閣の人々（完）」へ『東京朝日新聞』、昭和一四年九月八日付）。
(35) 党役職者は『民政』（柏書房、複刻版）の山本四郎氏の解題を参考にした。
(36) 前掲『添田敬一郎伝』、一四七～八頁。

(37) 毒舌で知られた政治評論家の阿部真之助は「抽象的に、ただ今、民政党に人物が欠乏してゐることを論じただけなら、民政党の誰れ彼れも、決して異論は唱へないであろう。しかし、私が乏しい中から、大麻唯男一人を拾ひ上げたら、これを快しとしないもの尠くも五十人位あるかも知れない」と論じていたが、当時の民政党内において大麻が置かれたかかる状況を的確に指摘した評として参考になる（阿部『人間と社会』〈三省堂、昭和一五年一〇月〉一七三頁）。

(38) 『東京日日新聞』、昭和一五年一月一六日付。

(39) 前掲・『官僚の研究』、一一七頁。

(40) 賀屋は、大正六年三月、東大卒、同年一〇月文官高等試験合格であり、井野は、大正五年一〇月文官高等試験合格、翌六年三月、東大卒であった。

(41) 伊藤金次郎『官僚わしが國さ』（寶雲舎、昭和一五年七月一五日）二二四頁。

五、結　語

以上の如く、戦前期日本における政党政治の盛衰が、官僚出身の政党政治家大麻唯男の履歴にいかなる影響を及ぼしたかを明らかにした。

まず、原内閣の成立に象徴される如く大正から昭和にかけて生じた政党の官僚に対する相対的な地位の向上が、大麻の政界進出の背景にあり、さらに政界内における政党のかかる地位の上昇が参与官就任という内務官僚時代の同僚を上廻る栄達を彼の下にもたらしたことを示した。爾後も大麻は、政党政治家としての履歴を飛躍させ、民政党結党以来、前例のない抜擢により幹事長の座を射止めたのである。

しかしながら、皮肉なことに政党政治は、彼が同党の幹部として中枢を担うようになった時には既に崩壊し、政党は衰退期を迎えていた。このことは、政治家大麻唯男の履歴の上にも影を落し、彼の政務次官就任、さらに入閣をも困難にさせた。つまり、政党内閣崩壊以降、政党人に割り当てられる閣僚ポストは激減し、政党が党内に閣僚候補を多

数抱えるようになると、党に対する貢献度は高くても少壮で政治家としては地味な大麻にまで大臣の座がまわることは難しくなっていたのである。政党幹部となった大麻の名が組閣の下馬評に再々上りながらも、入閣が見送られた背景にはかかる事情が存した。これ以降も、大麻は入閣への夢を抱き続けたが[1]、その実現は民政党解党後の東条英機内閣時代まで待たねばならなかったのである[2]。

（1）例えば、第二次近衛文麿内閣に民政党より小川郷太郎が入閣した際の大麻の反応について木舎幾三郎は次のように回想している。すなわち、第二次近衛内閣に「小川郷太郎が入閣したことについては、民政党内もアッ驚いたようで、ことに今度こそはと思っていた大麻唯男氏や桜井兵五郎氏（当時幹事長）の落胆振りは非常なものだった。（中略）一方大麻氏の方は、すでに町田総裁からその間の経緯（近衛が小川を希望し、桜内の代りということで入閣したこと〔――筆者注〕）をきいていたものとみえ、『小川君で結構ですよ』といったまま、この問題に触れることはあまり好まない様子であったので、ほっとした」とする（木舎『政界五十年の舞台裏』〈政界往来社、昭和四九年〉二七九～八〇頁）。

（2）昭和一八年（一九四三年）四月、大麻は、東条内閣の改造に伴い国務大臣として入閣する。この間の経緯については、拙論「東条内閣の一考察――大麻唯男を中心に――」（『神奈川工科大学研究報告　A人文社会科学編』第一三号、平成元年）を参照されたい。

追　記

本稿は、財団法人桜田会より中村勝範慶應義塾大学教授の主宰する研究会に提供された研究資金にもとづき執筆した。ここに謝意を記すものである。